



The Long Goodbye



*これはフクロノミツコで、お母さんの人形・服・髪に、お母さんの（お母さんの）お人形

ロング・グットバイ

メイド服とジーンズ

私は狸小路の創生川に面した通り角にある喫茶店で、持て余した時間を潰していた。店内を歩き交うメイド服のウエイトレスを眺めたり、『今日のオススメ』のローズヒップ・ティーを啜ったり、モンブランに銀のスプーンを点き立てたりしては、あれこれとネタを考えていた。

店内にはヘンデルの『水上の音楽』が流れていた。

私は窓の外から人に見つかるのもいやだったので、壁際に席をとり、さらに入り口から入ってくる視線からも隠れる場所にいた。

それなのに、どうやって彼女が私を見つけたのか分からない。

手元の明かりが遮られたと思うと、彼女がそこにたっていた。

「あなたが『ほくなん』さんね、

ここに座ってもいいかしら」

一瞬、ウエイトレスのひとりかと思っただが、そうではなかった。

私はこのウエイトレスの顔と名前（本名も、源氏名も）は、しっかり覚えていいる。例え、生き別れの兄の顔を見間違えることはあっても、彼女がこのウエイトレスではないことは、確信することができる。

彼女はタマゴに小筆でちょんちょんと目鼻を描きこんだようなような美人で、肩までのストレートの髪をバレッタかなにかでうしろ手に束ねてた。いでたちはブルーのジーンズとモーブ色の七分袖ポロシャツというカジュアルなものだった。

「えーっと、どなたでしたっけ？」

これだから自分は女の子の受けが悪いんだろうなと、内心舌打ちした。だれだって、そんな扱いされたら、横面を張り倒したくなるのも無理ないなと私は嘆いた。一度会っただけで、どこで、いつあって、そのときの彼女の服とか、髪型とか、アクセサリまでスラスラと出てくるくらいじゃないとダメなんだろうな、ああっ、と嘆息し

たが、それでも、それ以上の台詞なんかでてこなかった。

「はじめまして、

私たちは初対面よ、安心して、

ネットニュースのあなたの記事を読みました。

おじさんが影で画策している見合いか縁談を

断る口実の狂言劇の相手役募集中、というのに興味があるの、

私はあなたの『おさななじみ』じゃないけれど、

あなたの相手役にしていただけないかしら…」

彼女は私の態度を見透かしたようにいった。

「えっ、記事？」

でも、あれは、ちょっと、それに…」

ネットニュースの記事を読んで勝手にヘンな人物像を空想して、

誤解されているような間の悪さを感じたが、どう言い繕ったらよい

のか、言葉にならなかった。これは、新手のストーリーカーだろうか？

ウエイトレスがやって来て、彼女に注文を聞いた。

「いらっしやいませ、

ご注文をおうかがいします」

転がりだしたもの

車の助手席に座っている彼女に、改めて視線をやると、案外小柄な女性であることが分かった。ジーンズには不釣り合いな渦巻き貝をモチーフにしたイヤリングをしていた。

彼女はそこにあつた音楽CDを物色しながら、品そろえが気に入らないのか、入っては出し、早回しをしては、また取り替えをしていた。どうも彼女はCDの印字面を読むのがもどかしそうだ。多分、コンパクトレンズをしているのだろう、メガネをかけた彼女を想像すると、背筋に走るものがあつた。彼女は平均よりはずっと美人だった。

「えっと、よかつたら、名前とか教えてくれないかな。

一方的に、相手に素性を知られているというのは、

ぼくに具合が悪すぎるとおもつんだ。」

「そうね、具合はともかく、格好つかないわね。

それじゃ、名前は『笠原メイ』ということにして、

詳しい設定はここに書いてあるから、

あとで目を通しておいて。」

彼女はそう言つと、エト口のショルダーバックからレポート用紙十枚くらいをホチキス留めたものを取り出して渡した。

ハンドルを握って運転していた私は、その書類をどこに置こうか困つて、とりあえずダツシユボードの上に抛り投げた。紙にはワープロの十二ポイントぐらいの文字で、ぎっしりと名前から生年月日、学歴に職歴などが書き込まれていた。興信所の身上調査の報告書實際には見たことないが、だつてこんなに詳しくはないぞと思つた。

そのとき、実はこれは本名で、この身上書の内容も本物ではないかという疑念もわき起つた。

「じゃあ、笠原さん、

とりあえず、どこかで食事でもしようか。」

と、私は切り出した。我ながらうまい提案だと思つた。

「メイでいいわ、

それよりも、あなたの狂言劇の台本はないの？

段取りくらい教えてもらわないと、

役者は困ってしまうわ」

「じつは、まだ、ぼんやりと構想があるだけで、

具体的にはなにもつくっていないんだ」

私が照れたような口まわしで答えると、彼女はぶいっと助手席の窓を見遣って「そうつ」と呟いた。

とにかく、私は二人でゆっくり食事ができる場所を探すことにした。

それから二人で『びっくりドンキー』に行つて（くそつ、こんどから近くのフランス料理店をすべて調べてやる！）ハンバーグステーキを食べて、彼女を近くの駅で降ろして分かれた。

彼女に携帯の電話番号を教えると、彼女は週末にまた連絡をするといつて、駅のホームに消えた。

私には、彼女を婚約者としておじのうちに連れて行く段取りをすることと、この狂言劇の台本を作ること、そして、彼女の『設定書』をよく吟味する DOTT アイテムがスケジュールに追加された。

カーステレオには、ムード・ミュージックのCDがかけてある。

彼女は選曲を諦めて適当なものを入れていったのだろう。

ポール・モーリアの『恋は水色』が、空々しく流れているのだった。

ひつじ牧場

実家の用事があったて、おじの家を訪問した。玄関先で済むような用事だったので、さっさと片付けて退散しようとしていたら、おじが奥から出てきた。

「ずいぶん顔を見せなかったじゃないか、あんまり仕事に没頭するのも感心せんで、

どうだ、晩酌に付き合え」

「いえ、今日は車で来てますし、

これから約束がありますから…」

「なに、おんなかつ」と、おじはパアツとうれしそうに聞いてきた。

「えっ、あまあ、女性もいますね…」と、私は言葉を濁すと、もうすっかりデキあがっているおじは、懐に両腕を突っ込み、肩を落とした。奥からは、つけっぱなしのテレビから野球中継の歓声が聞こえてくる。

「どうしておまえは、

こうも女に縁がないのだろうなあ、

おれはおまえのあにきが不憫でならんよ」と、ぼやいた。

「ここでおじがいつている『おまえのあにき』というのは、おじの兄、つまり、私の父のことを言っているのだが、酔っ払っていなくても、おじはこの調子なのだ。自分の兄のことを『おれのオヤジ』とか言ったりもする。

傍で聞いていたおばは、話があらぬ方に行かないかが、気が気でないらしく、頻りに私に対して目配せをする。

「この間、おれが探してきた縁談も

なにも進めないうちに、むこうから断ってきたしなあ

なにがいかんのだろうか、おれはわからんよ」

なんだ、野望はすでに潰えていたんじゃないか、取り越し苦労だったなと思ったが、一方でがっかりもした。そこで何気なく「こないだの縁談って？」ととぼけて聞いた。

「ほらっ、その下駄箱の上に見合い写真が載ってるだろう。」

すいぶん無茶な伝手を使い、

苦労して取ってきた縁談だったのに、

おまえに連絡を取る前に、向こうから突然、

都合が悪くなったので、無かったことにして欲しいと言われて、

立ち消えになっちまったんだ」

「あなた、なにもそんなことまで言わなくても…」

と、おばが口を挟んだ。下駄箱の上のおばが拵えたススキにホウズ

キを添えた生け花のとなりには、見合い写真が置いてある。

手にとって開けると、育ちの良さそうなショートヘアに、メガネをかけた、薄萌黄色の着物、金地の帯、年のころは二十歳そこそこくらいにしかみえない女の子がすましてこちらを見ている。

でもなんか、へんな写真だった。

『ひつじ牧場』という会社をしているだろう

郊外に行くと、よく看板が立っている

あそこの娘なんだ」

「年はあなたとお似合いぐらいなのよ、

若く見えるけど」と、おばが付け加えた。

まちあわせの約束

私はなぜか口について離れなくなってしまったユーモレスクを口ずさみながら、職場からの帰宅途中に寄り道でもしようかと道路地図を机いっぱい広げていた。

携帯電話が鳴った。知らない番号だ、しかも携帯電話の番号ではない。

「もしもし?」

「もしもし、私よ、『笠原メイ』よ、いま電話しても大丈夫?」

なにもやましいことはないのだが、あわてて電話を持ち替えて、机の下に潜り込んだ。なんでそんな行動にでたのか、自分でも分からない。

地震のときに、おどろいてやかんの蓋みたいなどんでもないものを持って逃げるようなものだろう。私はすごぶるうろたえていた。

「もしもし?丁度よかった。」

話したいことがあったんだ」

「そう、来週の土曜日空いてる?」

ないない、あったって無いことにする。

「土曜日の何時?」

「えーっとね、土曜日の十一時半きっぱり、」

全日空ホテルの正面玄関車寄せのところに来て」

「えっ、車で乗り着けちゃって大丈夫?」

「ぜんぜんOKよ、約束したわよ、忘れないでね」

ガチャと電話が切れた。どうも公衆電話か喫茶店の電話からかけているような音で、後ろでピアノがなっていた。とりあえず、私はその電話番号を自分のケイタイに登録しておいた。

彼女は狂言劇がもういらなくなったことが分かったら、もう付き合ってくれないだろうか。確かに、二人の間には共通の話題といえれば、それしかないのだから、例え、彼女がそれでもいいといってくれても、そのあとで何を話したらいいのだろう。もうすこし、狂言劇のシナリオで引っ張ってみようか。このあいだもらった『笠原メ

『伊の身上書』は暗記するくらいに読んだけど、あれがフィクションでないという証拠はどこにもない。フィクションであるという証拠もどこにもない。つまり、私は彼女についてあまりにも、何も知らな過ぎるのだ。普通だったら、女の子はもっと自分のことを喋るものだぞ(ゲームではそうだが、現実だって、そうなんじゃないのか?)と私は思って、ケイタイに歯を立てた。

気が付くと、職場の後輩たちが不思議そうに、机の下で携帯電話を齧っている私を覗いている。

「あの、地震かなんか、ありましたっけ?」と、ひとりがおそおそと尋ねた。

ゲッタウェイ

その日は抜けるような秋の青空が広がっていた。ガソリンはマンタンにしてある、郊外の洒落たレストランを一ダース以上リストアップしてある、どっちに向かって走っても、第一候補から第十候補、おまけに補欠まで用意して、レストランが即座に選べるようになっている。

音楽の選曲は見当もつかないから、ムード・ミュージックから、ソウル、ジャズ、ロック、クラシック、Jポップに演歌まで揃えた。トランクには秋の溪流でお茶する準備から、吹雪に巻き込まれてもビバークできる準備まで積み込んである。カードも持った、財布も持った、下着は全部新調した。メンズ・ノンソンを片手にデパートに行つて、靴から時計に至るまで全部買った。ボータスの蓄えがごっそり減った。床屋、いや、メンズ・サロンとかいうところも行った。

これだけ準備したら、別人のように変わっているか、七五三のように滑稽になっているかのどちらかである。それは私にとってはどっちでもよかった。

全日空ホテルに着いたのは十時を回った頃だった。正面玄関は結婚式かなにかがあるのか、次々と到着するホテルのマイクロバスから盛装したおばさんたちや、黒服の男達が流れ出では、ホテルの中に吸い込まれていた。車寄せで横付けしようとする、タクシーがクラクションを鳴らして追い立てた。ドア・ボーイが客らしからぬ服装で、RV車に乗っている私を面倒そうに眺めている。

まだ、余裕があると思つたので、一度街中を一巡してから、約束の時間十分前くらいに戻ってくればいだろうと、ハンドルをぐるりと回した。カーステレオにはロック集を突っ込んだ。デュービー・ブラザーズのロングトレインランニンのイントロが流れ出した。正面玄関から幹線道路への入り口の方へ視線を移したときに、視界の隅のほうで、人波が泡立つようなざわめきを感じた。

それでもそのときは、それに気をとめることもなく、私は左折の

ウィンカーを出して、幹線道路の車の切れ目に神経を集中していた。

だいぬけに、助手席のドアがガバツと開いたかと思うと、真っ白いものが、吹雪が吹き込むかのようになだれ込んできた。

「はやく、車をだしてっ」

誰かが耳元でどなった。私は驚いてアクセルを踏み込んで、幹線道路の車の流れに車体を躍らせた。後続車が慌ててブレーキしてクラクションを鳴らした。ステアリングが流れるのを必死で抑えて、道路中央の高速帯に入ると、ギアをトップに入れてアクセルを踏み込んだ。

改めてよくみると、真っ白い吹雪の正体は、ウエディング・ドレス姿の『笠原メイ』だった。ご丁寧なブーケまで持っている。バツクミラーには、全日空ホテルの辺りにできている黒山の人だかりが映っている。なにがあったのか見当もつかない。

「ひとつ聞いてもいいかな？」

と、状況をいまいち把握できていない私が、おそろおそろメイの様子を窺うと、彼女は先ほどの威勢はどこかにやっってしまった、しおれるように俯いてしまっている。

いつのまにやら、ちゃんとシートベルトまでしている。

「あの、いまぼくがなにをやらかしてしまったのが、

説明してくれないかな」

「……………」

「じゃあ、これから何処に向かったらいい？」

「どこでもいいの、

わたしをさらって逃げて、

郊外に抜けて、どこか遠いところまで、

わたしを連れて、逃げて欲しいの……」

運転する左手にしがみ付かれて、哀願されて、私は困った。私を見つめるその目を見ると、どこか別のところで見ただことがあるような気がした。そっだ、あの見合い写真の女だ。

私はなにがなんだかわからなくなって、道央道に上るとアクセルを踏みつづけた。

どこまでも、どこまでも続く道が青空につながっているように見える秋の日だった。ステレオからは搾り出すようなハーモニカの音が流れていた。

ストライク・バック

私の心はひどく傷き、体は疲労困憊していた。それでも、例の喫茶店で仕事を片付けていた。日常生活のリズムを取り戻すことは、混乱した自分自身を取り戻すための近道だと思っていたからだ。もちろん、そんなことは欺瞞にすぎない。ウエイトレスのメイド服は表面的で、記号的ですらある。それは圧迫感がなく、それは私の心を和らげた。

冷め切ったダーズリン・ティーに手を伸ばしたところで、誰かが私の席の前に立った。見上げると知らない上品そうな女性が、私が彼女に気付くのを待って、私を見詰めていた。

私は何か用があるのだろうか、「なにか御用ですか」と声を掛けてみた。彼女はちよっと、ためらいがちに、視線をそらすと、「座ってもいいですか」と尋ねた。彼女は、『笠原メイ』とは対照的に、内向的な印象を受けた。カーテンのような長いスカートに、白いブラウスの上に、ダークブルーの薄いカーディガンを羽織っている。髪は肩まで垂らしていて、銀縁のめがねをつけ、俯きかげんなので、表情がよくわからない。

「あの、ほくなんさんですね、

私は例の『笠原メイ』の親友で、ルフィミアと申します。

今日はお願いがございましてまいりました」

彼女の声は細々としていたが、歌うように話すのだった。

しかし、『笠原メイ』と聞いた途端に、私は恣意的な頭痛に襲われて、意識が体から抜け出して、この有様を天井から見ているような錯覚に陥った。

「悪いのですが、いま怪我をしていて不自由な状態にあるので、内容によってはご期待に沿いかねる場合がありますが、表どのようなことなのですか、

えー、ルフィミアさん？」と、私は彼女の表情を覗き込むように見つめると、ルフィミアは私の瞳を覗き返すみたいに眼を合わせて、「まあ、お怪我なさっているのですか、どうなさったのですか？」と、

驚いた。

「ええ、ちよつとした行き違いがあつて、クマみたいな大男に殴られて、

ガラにもなく取っ組み合いのけんかをしてしまったのです。

おかげで、唇は切れてしみるわ、

足といい、手といい打ち身と捻挫でガタガタ、

アタマは脳震盪したみたいにガンガン痛むのです

踏んだり蹴ったりとはこのことです」

ルフィミアはレースのハンカチで口元を覆うと、私を見つめて「かわいそう…」と呟いた。いや「いたそう…」と言ったのかもしれない。とにかく、彼女にそんな風に言われたとたん、私は思わずぼろぼろと涙を流して泣いてしまった。それまで、だれもそんな優しい言葉を掛けてくれなかったからか、だれもどうしてそんなことになったか、と親身になって聞いてくれなかったからか分からない、涙が溢れてきて止まらなかった。

そんな私にはお構いなく、ルフィミアは勝手に喋りだした。

「メイと私は幼馴染で、

学校もずっと同級生なのです。

いつも一緒にあそんでおりまして二人で旅行もよくしました」

ルフィミアの声は、キーは高いのだが、トーンが低いので海の底から聞こえてくるささやきのようだった。

「ついこないだは、エジプトにいきました。

とっても刺激的でしたけど、

くたくたにつかれて、もうコリゴリって言ってたくせに、

メイったら、次の日にはインド旅行を計画するんですよ」

「ふむ」

「私はメイの後について行くのはたのしいし、

メイは文句も言わずに私がついていくので、

自分の好き勝手ができるのがいいのです。

私たちはうまい組み合わせの友達なのです」

メイの話題を話すルフィミアはたのしそうだった。こんなにすてきな笑窪ができるのかと、おもわず顔を覗き込んでしまつくらいに朗らかに微笑むのだった。

私は適当に相槌を打って、話に聞き入る振りをしていたが、実際には、ルフィミアの頬から首筋に流れ、透き通るような白い肌の感触を想像してうわの空だった。

「それが突然に、メイの縁談話でおかしくなったのです。

この縁談話がとつてもヘンなのです」

彼女はブラダのポーチを持ち替えると、椅子に深く座りなおした。

「はじめは普通のお見合いでもするのだから」と、

メイも私もタカを括っていたのです。

でも、メイもメイのご両親ですら知らないうちに、

どんどん話が進められていって、

話があつて一ヶ月とたたないうちに、

拳式になつてしまつたのです。

それで、メイは文句を言つたのですが、

メイのご両親は仕方が無いと云つて、

全然取り合つてくれないのです。

もう、おとぎ話みたいに、『竜神様の人身御供』なのです」

そこまで一気に話すと、ルフィミアは眼を伏せた。

「メイは一計を案じ、逃亡を試みたのですが、

あえなく捕まつて連れ戻されてしまいました。

メイから連絡をつけても、私どうしたらよいかわからなくて…

いま、ほくなんさん以外に、お願いできる方がいないのです。

どうかメイを救い出してください。お願いします」

ルフィミアは、そつ言つとペコリと頭を下げた、私も釣られて「いえいえ」と、ペコリと頭を下げた。メガネのレンズ越しに見えるルフィミアのひとみにはさええ涙が浮かんでいた。

メイの所在

ルフィミアは俯きかげんで、時々メガネのブリッジを指で押さえ
てはメガネを直して、訥々と話すのだった。ぼんやりと話を聴きな
がら、私はどうしてこんな映画の話みたいないな事件に巻き込まれてし
まったのだろう、なにか悪いものを食べただろうか、夢だったとい
うことに落ち着かないだろうか、思いあぐねた。

「ルフィミアさん、それではメイがいる場所をご存知なのですか」

「る〜ちゃんって呼んで下さい」

「じゃあ、るうちちゃん、メイと連絡を取る手段はあるのですか」

「るうちちゃんじゃなくて、る〜ちゃん」

ルフィミアは、あくまでも小さな子供に言い聞かせるように、優
しく直すのだった。それはなにか恋人同士がじゃれあっているよう
な感じで私はこそばゆく思った。

「る〜ちゃん？メイと連絡をとれるのですか」

彼女は「はい」と頷くと、ポーチから赤い革表紙の手帳を取り出
すと、覗き込んだ。

「メイはフリーメールのアドレスを持っていて、

私たちはそれを使って連絡を取り合っています。

メイは『ひつじ牧場』の自室に閉じ込められているようです。

そこは一応インターネットが使えるようなのです。

それ以外の方法は全て押さえられてしまっているようです。

じつは、私も監視されています。

ですから、私の本名はお教えできません。この格好も変装です。

でも、私はメイ程には厳重に監視されていませんから、ほくなんさ
んは私にケイタイで連絡を取ることができます」

そう言つと、ルフィミアはポーチから携帯電話を取り出すと、カチ
カチ操作して自分の電話番号をだして私に見せた。

どこまで本当なのか分からない。ルフィミアの細く流れるような
長い髪はウィッグには見えないし、めがねだってちゃんと度が入っ
ている。

牧草地の一本道

とにかく私はメイの救出をルフィミアから引き受けてしまった。ルフィミアになにか方法を授けてくれるかと期待をしていたのだが、「とりあえず、『ひつじ牧場』に行ってみてください」と言われて、手書きの地図を渡されただけだった。地図には、『ひつじ牧場』の入り口と牧場施設の位置関係が四角と直線で書かれてあって、そのなかのひとつの施設建物が塗りつぶされており、矢印が引かれたさきには、「メイはここ」はやくたすけてーと、走り書きされているだけだった。

私は、どうやって、メイをそこから助けたらいいのか、なにも思いつかばなかった。

とりあえず行ってみることにした。

地図でみると、『ひつじ牧場』は、郊外の宅地が途切れた辺りから広大な範囲に広がっている。観光施設も兼ねているので、入り口には、十分な広さの一般客用駐車場が用意されている。

私はケイタイで、ルフィミアにメールを入れてから、朝早く『ひつじ牧場』に出かけた。観光客の姿は無かった。駐車場には何台か車が止まっていたが、それらはアベックだったり、休憩中のタクシーだったり、どうも牧場には関心が無いようだった。

『ひつじ牧場』の入り口に立つと、OK牧場のようなアーチ状のゲートが作りつけてあって、キーストーン的位置に漫画的にデフォルトメされたひつじの頭が嵌め込んである。

牧草地は地平線まで広がっていて、その真中を一本道が貫いている。芝よりはちょっと背が高いくらいの牧草はまだ朝露に濡れていて、霧の向こうには、かすかに牧場施設がZゲージの飾りのように空との境に植えられている。

私は黙々とその道を歩いた。何をしたらよいのかも分からないが、幸いどこに行けばよいかだけは明確だった。しばらくして振り返ると、こんどは入り口がZゲージになって霧に霞んでいた。私は結果を書き忘れた物語の主人公になったような気がして心細くなった。

メイのいる建物は、意外にも建売住宅のような平凡なものだった。ルフィミアが予め知らせておいてくれたのか、メイは二階の窓から顔を出して、こちらを見ていた。

私が見上げると、犬の尻尾のようにパタパタと手を振った。

サルビアの紅い花

その建売住宅の周りには、フェンスが設けられていて、立入禁止のプレートが貼ってあった。

私が入っていくと、メイが「こっち、こっち」と、手振りで指図するので、それに従って、家の裏手に回る、とてもコロアイよろしい白樺の樹があり、太い枝をメイのいる二階の窓につながる屋根に差し伸べて呉れていた。

ここまで来たのだからしょうがないと、樹の幹に手を懸けて、体を持ち上げる。登ったところで、こんどは屋根の上に懸かった枝にぶら下がって、屋根の上に足を置いて、重心を移しかえた。トタンかと思っただが、薄手の瓦で葺かれた屋根は、滑ることも、軋むこともなかった。それでも重心を崩して滑り落ちないように、四つん這いになって、メイのいる窓辺に寄った。

「すてき！」

まるで、ロミオとジュリエットみたい、私、恋してしまいそうよ」「と、メイが感激して叫んだ。

私は危うく屋根を転り落ちそうになった。メイにとって私は一体なんなのだろうか。メイは私の湿布やらサポータに気がついたのか、「あれから大丈夫だった?」

と、心配そうに尋ねた。答えようが無い私は、

「うん、まあね」と、曖昧に頷いた。

結婚式場から脱走したメイと私はそのあと月形温泉の辺りで一休みしているところを、追ってきたひつじ牧場の従業員たちに捕まった。従業員といっても、カウボーイみたいな連中で、なにせガタイはでかいし、喧嘩早い、私は事情を説明し、言訳をするひまもなく、殴り倒されてボコボコにされてしまった。後れてやってきた牧童頭の中川さんという人が事情を分かってくれて、ようやく私は開放されたのだった。

「私、てっきり、うちの若い連中が、

あなたを簀巻きにし、重石をつけて、

豊平川に沈めてしまったんじゃないかと心配していたの」

と、ほんとうに済まなそうに、メイは言った。

私は腹が立てるべきだった。そんな危険なことに人を巻き込んでおいて酷い女だと思っただが、メイと向かい合っていると、なんでも許してしまえるのだった。

「ルフィミアさんに言われて来たけど、

これからどうするつもり？」

と、私が尋ねると、メイは何か不条理な難問を押し付けられたかのように難しい顔をして腕を組んだ。

『「ルフィミア」？』

ああ、あの娘変わっているでしょう」

「そうだね」

「でも、なんで『ルフィミア』なわけ？」

「さあー」

「車で来た？」

「一般客用駐車場に置いてきたよ」

私はメイのいたアルミサッシの窓枠に掴まった。窓から部屋の中をのぞくと六畳ほどの広さの洋室に机と本棚に、ベッドがあるだけの小奇麗に片づいた部屋だったが、ベッドの上には旅行の前日みために三つ四つのかばんとコートやブラウスなどを物色したらしく、それらが山を成していた。

ベットカバーはパステルカラーのモスグリーンで、その上に朱色のレインコートや赤のギンガムチェック地のシャツが積んである。マチスの絵のようなコントラストだ。私は「サルビアの赤い花を敷き詰めて……」という歌詞の一節を思い浮かべていた。

メイはぐるぐると無意味に走り回っていた。

「それじゃあ、脱出よ、逃亡よ、ちょっとまってね」

と、メイはその辺にあったカーディガンとか、財布とかをエルメスの布バックに詰め込んだ。メイはベージュのサブリナパンツにエメ

ラルドグリーンのポロシャツを着ていた。髪をまとめているので、メイが動く度に、うなじの後れ毛が熱帯雨林に棲む極彩色の鳥の羽根みたいにひらひらとゆれるのだった。

ひと通りの持ち物をかき集め終わると、メイはクロゼットから赤いバーバリーのジャンパーを取り出し、ジョギングシューズを履いた。

「ねえ、知ってる？」

私、ほんとうはひとりでも、

ここから逃げる事ができたの、

でもなんかそれって、

ただの家出じゃない？

だから瑠璃子に助けてーってメールしたの」

メイは喋りながら窓枠を乗り越えようと、私と一緒に窓枠に縋り付いて足元をそろそろと探りながら、かばんを部屋から取り上げた。

私がそれをもってやって、

「瑠璃子って、『ルフィミア』ちゃんのじゃっ」

と、尋ねると、メイはどこに捕まるうか思案した挙句に、私のかばんをぶら下げている手に掴まった。

「そうよ、

とにかくね、

ホントに来てくれるなんて思ってたから、

私、とっても、うれしいのよ」

そう言いながら私の手に掴まっているメイは、離れたら承知しないわよ、とばかりに私を睨んでいた。

「ぼくが来ると家出でなくなるの？」

「ありまえじゃない、

これは駆け落ちよ、か・け・お・ち、

もう、ドキドキしちゃうわね、そう思わない？」

私はメイを屋根伝いに白樺の樹に抱きつかせて、そのまま二人で白樺の樹から降りると、片手にメイのかばんをもち、もう片方にメ

イの手を握り締めて、まだ、視界がおぼろげな牧草地の一本道を走った。

メイの手は私の掌の中で、ひんやりと冷たかった。私はメイがこの小さな手だけ残して消えてしまいそうで、走っていて振り返ることができなかった。

ロング・グッドバイ

私は、メイを車に乗せると、ルフィミアに電話をした。ルフィミアが電話に出ると、メイと代わった。メイとルフィミアはこれからの予定を相談しているようだった。私はなるべく目立たない道を選んで、『ひつじ牧場』とは反対側の郊外に向かった。電話が済むと、メイは「ありがとう」といって私の携帯電話を返した。私はそれをダッシュボードに滑らせた。

「それで、これから何処にいったらいい？」

「空港にお願い」と答えてから、メイは運転する私の表情を上目使いにみて、躊躇いがちに、「わたしと一緒に来る？」と、聞いた。

「えっ？」

「あのね、私はこれから瑠璃子の用意してくれた

ロードアイランドにある別荘に行くの、

私と一緒に行って、暮らさない？」

「どのくらい？」

「…ずっと」

「生活費とかどうするの？」

「別に心配ないわ、あなたは別に働く必要もないし、

二人して旅行したりしても暮らしていけるの、

私たちがまくやっているとと思うわ、

一緒にきて

そういうと、メイは俯いて黙ってしまった。いまの仕事も生活も一切を投げ出して、メイと一緒にアメリカに行く、そこでヒモみたいになってメイとあそんで一生暮らす。よく考えてみれば、百年分の盆、正月それにクリスマスが、一度にやってきたような大判振る舞いである。でも、私は迷った。

自転車に乗っている男のとなりにもジンのリンカーンがとまって、この車を運転手ごと呉れてやるから、その小汚い自転車を捨てちまえと言われたようなものだ。その自転車には、男のいままで生きてきた思い出があり、苦勞と喜びを共にしてきた歴史があった。

「今は決められない」

「えっ?」

「きみと一緒に行くかは、今は決められない」
私は繰り返した。

「どうして?」

考える時間なんて幾らあっても同じよ、

だれに相談することもできない選択だから、

それとも私がきらい?」

「そうじゃない、あまりにも突然で、考えがまとまらないんだ」と、
私は弁解した。

そうだ、それは弁解でしかない、決断は今でもできる、YESと
いえばメイは私の首に飛びついてきてキスしてくれるだろう、NO
といっても別にそれはメイを傷つけることにはならない、メイは私
をストイックで欲のない聖人君主と想ってくれるかもしれない、ど
うして今決断できないのか、私にはその理由がわからなかった。

空港に着くと、ルフィミアが迎えにきていた。私たちはファースト
クラス・ラウンジに向かった。

ルフィミアはメイに「先に行っていて」というと、私の腕をつか
んでロビーに引っ張って行った。メイはちょっと振り向いたが、そ
のままラウンジのあるほうに歩いていった。

「まだ、返事してないんでしょ」と、内緒話みたいにくっそりとル
フィミアは言った。

「あまりにも突然だったもので…」

「ねえ、メイのこと嫌い?」

ルフィミアはあくまでも静かに尋ねる。まるで、そんな質問はど
う答えようがぜんぜん関係ないような感じだ。

「スキとかキライとかじゃないんだ」

と、私が答えると、彼女はそっと私に寄り添い、私を見上げると、

私の目を見ながらもう一度聞いた。

「メイのこと嫌い?」

「嫌いじゃないよ、

メイが僕のことをどう思っているかは分からないけど…」

「メイがあなたのことを、

どう思っているか分からないから返事ができないの？」

「いや、そういう意味じゃない」

「メイはあなたのことを好きよ」

私は黙ってしまった。どうして決断できないのか自分でも分からないのだから、それを他人にどうして決断できないのか説明できるわけがない。ルフィミアは困ったように、くるりと身をひるがえすと「うーん」と唸った。

「じゃあこうしましょう。」

あなたには一週間考える時間をさしあげます。

あなたが返事をするつもりでしたら、

来週の今日、朝の九時に、私のケイタイに電話をください。

メイを追手から巻くための工夫が大変なのです。

メイには私から言っておきます。今日はこれでお別れしましょう」

私はなにも言わなかった。

ルフィミアは別れ際に、「きょうはごつもありがとごいまして」と、丁寧な頭を下げた。それで、私は帰ってきた。

次の週、私は仕事に忙殺されて、ルフィミアに電話をかけるのを忘れた。いや、私は本当にルフィミアに電話をかけるつもりだったのだろうか、もし、覚えていたとしたら、ほんとうにかけていたのだろうか、私にはわからなかった。それ以来、ルフィミアのケイタイの電話は繋がらなくなり、メイにもルフィミアにも会うことはなくなった。

私は今日も、仕事に忙殺され、インターネットに愚痴を書き込み、知人とじゃれあっては楽しく暮らしている。もう、コスプレ喫茶でお茶をシバいていても厄介ごとを持ち込んでくる者は現れない。

私はそれで幸せなのかもしれない。